

2日目  
第五部

## パネルディスカッション 「C-PLATSの成功に向けて」

平成23年3月11日(金)  
於・シーサイドホテル舞子ビラ神戸



●座長 仲野先生

●パネリスト 高村教務部長 川窪先生  
 廣田学生部長 野波先生  
 尾崎先生 小森キャリアサポート室長

●仲野—

みなさんこんにちは。お昼を終わられてくたびれていらっしゃると思いますが、このパネルディスカッションは1時から2時50分までのご予定にさせていただきたいと思います。10分間の休憩の後、最後のセッションへと入ってまいりますので、私どもに与えられた時間は1時間50分でございます。まずよくご存じだと思いますが、パネリストの先生がたをご紹介いたします。まずこちら、私の手前から高村先生でございます。廣田先生です。川窪先生です。尾崎先生です。野波先生です。それから小森さんです。この6人の方々からさまざまなご意見をまずいただきます。実は、打ち合わせが全然ございまして、昨晚指定席のお食事をいただいたのですが、みなさんもさっそくお酒を飲まれてしまわれまして、ほとんど今日のパネルディスカッションに関してのお話は出なかったのです。ですのでどんなお話が出てく

るかは私もひやひやドキドキで、それをいただきながら手元で少しまとめながら、のちの議論、ディスカッションの部に入っております。そして後半のほうでは、ギャラリーの先生がたのご意見やご質問を頂戴したいと思っておりますので、何が出てくるかわかりません。玉手箱になるのかパンドラの箱になるのかわかりませんが、よろしくおつきあいいただければと思います。私は申し遅れましたけれど、仲野でございます。どうぞよろしく願っています。

ではまず今日のパネルディスカッションの私が勝手に思い込んでいる主旨をちょっとお話しさせていただきます。それをこの6人の先生がたもほとんどご存じないので、主旨を聞かれて発表内容を変えなくてはいけないかもしれませんので、ちょっと聞いてください。

まずこのパネルディスカッションはC-PLATSの成功に向けてというのがタイトルになっています。このC-PLATSの成功に向けて、ようはどのような考え方、行動をわれわれ教職員一同がとっていかればいいかということを探るようなパネルディスカッションにしていければいいかと思っております。実は新しいビジョンや考え方を実践するためには、その実行者は私たち一人一人ですが、その実行者にとっては、価

価値の大きな変化を体験することになります。ですから結果として困ったことになる可能性があるのです。いろんなところで考え方を変えたり、やり方を変えたり、習慣を改めたり、ひょっとしたら自分の立場や自分の今まで信じていた信条まで手を入れたいといけなくなるからです。

上からやりなさいと言われることが私たちは大嫌いな人間ばかりが集まっております。どこの世界でも上からやりなさいと一方的に言われるのは好きではないと思いますが、とくに学校関係者というのは難しい人が多いです。一般社会で通用しにくい人も多いです。ですから上からやれと言われたらなかなか人は動きません。動いている振りはしますが、納得して意志をもってやろうかなというふうにはなっておりません。うわべだけやります。時間がないからつべこべ言わんとやれと言われる。あるいはそのニュアンスが時々匂ってまいります。そう言われると余計やたくなります。ふに落ちて初めて私たちの血や肉になって、我々は動くわけです。それは人間誰でもそうだと思いますが。学生は自分に興味のないこと、自分にかかわらないことには重い腰をあげようとはしません。先ほどの分科会の発表でよくわかりました。私たちはどうでしょう。同じなんです。モチベーションが高まっていかなければ動きません。しかも給料をもらっているというのは大きなモチベーションの一つです。大変ありがたいことです。そしてそれはモチベーションの一つですが、これだけでは動かんぞとどこかで私たちは、思っています。すなわち理念とか教育方針とか自分がやってきた専門性や実績に根付いた実践とか、そういったところをどこかで大切にしたいという気持ちを私たちはみな持っているからです。それが教育に携わるもののある意味特色です。それは教員、職員かわかわらずです。教育者であるからこそ、何のために何を目指して、どのように自分のスキルや専門知識を活かせるのかを私たちは探し求めている存在です。

それと今日の研修会でいろいろ学ばせていただいたことがどこかで少しずつ出て行かないと私たちはなかなか動けません。ゆえに本当にC-PLATSを成功させるためには、この考え方を私たちみなで共有でき、理解ができ、実践できるものにするしか、もう道はないわけです。でC-PLATSやりますよと、これは変えられないんですよと昨日以来学長が口をすっぱくしておっしゃっています。®が付いているということは登録商標だか特許だかをお取りにいられているということで、これで進んでいくということです。ですからそこから私たちは泣いてもわめいても逃げられない

わけですけれども、しかし少なくとも私たちが納得できて理解できて実践できるものに少しでも近づけるということが大事だと思います。ただし私たちは、企業の総合職としては失格しそうな人間ばかりです。なぜならば私たちはスペシャリストだからです。ゼネラリストとして立ち居振る舞いが上手かと言うと、あまり上手じゃない、比率も高いかと思えます。それぞれの持ち味を生かしながらこのC-PLATSを実践していく、適材適所に人材を活かしていくことが重要なのかなと2日間参加して思いました。

ですからいろいろな立場、観点から本日は6人のパネリストの先生がたにご登壇していただいているのです。このパネルの主旨はきれいにまとめることではありません。きれいにまとめることが主旨ではございませんので、批判よし、賛成意見よし、文句よし、不安よしです。ただしこのパネルによって私たち一人一人の心に火を灯さないといけないと思っています。それは弱い火かもしれませんが、取捨のつかない大火事になるような火かもしれませんが、何らかの火を灯したということ、今日たまたま座長を仰せつかった私の切なる願いでございます。なんとかこのC-PLATSをよりよいものとして、大手前大学を前進させることに興味を持っていただくこと。よっしゃ、仕方ないけどいっちょやってやるか。ただしおかしところは言わせてもらう、という態度でけっこうですので、そういう気持ちに少しでもなってもらうことがこのパネルディスカッションの主旨であると思っておりますので、そのつもりで先生がたご参加いただければと思っております。

それでは、次に進みたいと思います。今から、パネリストの先生がたそれぞれのお立場もございまして、C-PLATSにかかわる部分でどのような角度でとくに深くかかわってくださっているのか、あるいはこれからかかわろうとしてくださっているかということで、それぞれの先生がた、特色も持っていられたいと思いますので、とりあえずまず5.6分をめぐにお一人お一人今一番言いたいこと、訴えておきたいこと感じたことをお話いただこうと思います。いつも手前からになりますので、今日は向こうから、小森さんからまずご発表いただきたいと思っております。5.6分でございますので、よろしくお願いたします。では小森さんからお願いたします。

#### ●小森一

はい、キャリアサポート室の小森です。私は先生がた違いました職員という立場です。職員のなかでも出口を扱っ

## C-PLATSの成功に向けて

ている責任者として、この就業力の授業、そしてC-PLATSが成功することを切に願っている職員の一でもあります。そういうわけで2点ほど、実務的な問題提起をさせていただきます。ただければというふうに考えております。よろしく願います。

まず一つ目ですね。C-PLATSが成功する一つのポイントとしては、やはり先生がたのフィードバック、ここが一つのポイントになります。フィードバックのときのポイントとしましては、振り返りを一緒にする。そしてそういう自己評価を、なぜそういう事を思うというのを一緒にやってあげることにしたいと思います。特にそのときに問題になってくるのは、自己評価と客観的な評価。ここでいう客観的な評価というのは、GPAだとか成績評価というところ。それと教員評価、外部評価とこの3つの評価ですね。それと自己評価との格差がある学生について特にどうするかというのは問題になってくるかなと思います。

たとえばですけども、自己評価が非常に高い学生。たとえばC-PLATSが10項目すべて3の学生がいたとしましょう。その学生がGPAが1.4だと、教員評価もそんなに良くない。たとえば平均して1.5だと。外部評価も1だという学生をどう振り返りすればいいか、どうフィードバックしていくかということが非常に大きい問題だと思います。それとも一つ、フィードバックのときの量という問題を提起させていただきたいのですが、私どもが学生と接するときに、1人40分というのを決めています。40分面談する前に、やはりその学生がどういう学生生活を送ってきたか、どういう就職活動を送ってきたか、どういう趣向を持っているか、どういう状態かというのを事前にデータを収集して、面談にのぞんで、そしてどうい対応をしたかという、データを蓄積保存するようなメモ書きをします。そうすると、1人当たり最低でも1時間、難しい子は1時間半、2時間かかります。

まずフレッシュマンでフィードバックすることを聞いていますけれども、フレッシュマンについては一人当たり先生がた25~6人担当されると聞いておりますので、それを1人たとえば2時間としたら52時間の量的質になってくると。それが果たして期末の時間の一番忙しいときに取れるのか、可能なかというところを、先生方の本音をお聞きしたいというのがまず一つの問題提起でございます。

次、大きな2番目の問題提起といたしまして、C-PLATSの成功の一つのポイントは、昨日から話しているPBL授業なんだというふうに理解しています。PBLについては基本

的なことがらを芦原先生に資料で後ほど確認していただきたいんですけど、Pは2つのPがあると。一つはプロジェクトベースラーニング。もうひとつはプロブレムペイストラーニングだ。これは問題解決ですね。2つのPなんだと。本学のPBLは基本的にはプロブレムペイストラーニングだとおっしゃっていました。

私はその就職出口を預かっていることからしますと、やっぱり会社に入る、組織に入るというのですから、組織の中でどう働くかということを考えてと実際に組織、チームでプロジェクトベースラーニング、そこを経験させてほしい。これを大学側としてどれだけ提供できるか。そこが一つのポイントだ。それとも一つ、大学としてそういうプログラムを提供できるかどうか。可能なかということ、もう一つ学生自身がPBLの10項目をバランスよく取れるだろうか。たとえばメディアの学生においてはクリエイティビティとか、自分の世界に入れる授業をたくさんとっている、プロジェクトベースラーニングの授業を取らない可能性がある。それでは誰がそれを取るように指導していくのか。こういった課題があるんじゃないかなと思っております。その2点を問題提起とさせていただきますと思います。よろしく願います。

## ●仲野—

ありがとうございます。では引き続き野波先生お願いします。

## ●野波—

野波ですよろしく願います。私は去年の9月から日本語表現、初年度のコア教育にかかわってきたのですが、今回はコア教育でC-PLATSをどう生かすか、何をやってほしいかというのをかなりいろんなご意見をいただきまして本当にありがとうございます。実際にキャリアデザインのほうのシラバスを具体的に考えるうえで非常に役に立つ内容がたくさんございました。

実はただ私は問題提起というよりも感想をといいますが、初年次教育に今までかかわってきて、4年間継続して今まで初年次教育というのをやってきて、昨日からやってほしいと言われてきたことは初年次教育でやっているのですね、実は。初年次は伊丹にあるので、みなさんが内容をご存じないというのがあると思うのですが、たとえばみんな毎回課題を出しようという話もありましたけれども、初年次ではたとえば13回、全部ですね、大体1時

間から1時間半の課題を13回出さないと単位をあげない、英語、情報、日本語ですね。そういうふうにごく厳しい学習習慣を身につけようというのが目的ですので、そこまで厳しくやって、あとはパワーポイントの先ほど提案されていた3分スライド5枚。これは情報活用の授業で全員に教えています。それなのにパワーポイントを教えてほしいということが出てくるほうが不思議だなと。だから実際にはやっていてもコア教育だけでは無理なのではないかなと。コア教育にずっとこれをやってほしいこれをやってほしいじゃなくて、逆にコア教育で今までやってきたことを他の授業でもやっていかないと学生には身に付かないんじゃないかと、逆に広げていくという方法がいいのではないかなということを感じました。

それとPBLも実際今までやっていないわけではなく、先生方にお聞きしましたら知識偏重型から考える方向にとどの先生がたもおそらくやっておられるんだと思うのです。それでも身につけていないということはそこまでは終わっててその次に何か問題があるのではないかと私はすごく感じました。それが1つめです。あと2つなのですけれども、山下先生が昨日やってくださいましたワークショップの、私も気になったので1年生のだけ昨夜すべて見せていただきまして、やっぱりマナーの部分であいさつというだけで10名ほど、マナーをやってほしいということで9名、ほとんど3、4割がその部分でソーシャルレスポンスビリティというところだと思わなければ、そこを評価しないといけないなと痛感したんですが、でもやっぱりこれもコア教育の中のキャリアの中だけでできることではなくて、教職員みんながあいさつしようねとか、職員も含めたなかでみんなやっていかないと、コア教育というところだけの問題じゃないなということが非常に大きいというのが感想です。

それからもう一つ、OCDですね。実は私キャリアデザインの中で実際に学生にC-PLATSの中で学生に目標設定をさせないといけないという授業を1回目に入れているんですが、実際に入学後のオリエンテーションのときに芦原先生のほうから30分お話をいただこうと思っているのですが、そのときにこれを学生に配りますと言われて。これをキャリアデザインの先生がたに学生に教えていくということが本当に可能なのかというと、すごく難しいなと感じまして、学生用のOCDというのがもっとかみ砕いた形の、学生の立場だったらもう少しこういう形の具体例があるのだよという、もっともっとかみ砕いたものがないとなかなかC-PLATSの

成功にまでいかないのではないかと感じました。以上です。

#### ●仲野一

ありがとうございます。では尾崎先生お願いします。

#### ●尾崎一

尾崎でございます。先生がたはそれぞれのお立場からここにいらっしゃるのだらうと思います。私は今週の月曜日にここに座れと言われて、どういう立場で話そうかと思っていました。先ほど仲野先生のご発言で私の立場がよくわかりました。上からの言うことを聞かないという代表で批判しろと、批判というよりは何か提案されていることに対して違う考え方もあるぞというのをかかげて、議論の口火になればということで発言させていただこうと思います。

C-PLATSということで、配布された資料を見させていただくまで理解できていないこともございますが、すべての学生に浸透させる社会人力の体系である、および問題解決力である。先ほどから出ているPBLの問題ですが、問題解決学習というのは実は私は非常に賛成をしている、共鳴をしているところがあります。昨日の芦原先生の授業にありましたように、できないことに関してはできないところから少しでも伸ばすように、できるところはもっと伸びるようにということで、それぞれの学生のニーズに合わせて対応していくことはまさにそのとおりで、一斉学習でやっていくことに限界を感じておりました。私は日本史ですが、たとえば日露戦争の話しますと、学生なんかは日露戦争はどういう意味を持っているのかという話をするともうこれはついていくことがない。欧米の研究者の中では日露戦争は第0次世界大戦として位置づけされているのですが、そんな話をしたらほとんど聞いてくれないです。100人一斉に授業する中で、どこまでわかってきているのかなという到達度が私自身理解できない中で、そうした問題解決学習という考え方を非常に興味を持って聞いていたのですが、ただそのなかで、実際は運用をしていくということでどうかということが直ちに思えてきましたので、2つほど上げさせていただこうかと思えます。

学生個人個人のニーズに合わせるということですから、どうしてもクラスの単位、サイズを小さくしないとイケない。少人数を基本にしないとイケないのではないかと。今日午前中のお話のなかで、石毛先生でしたか、学生個人の名前を覚えてするのは非常に効果があるとおっしゃっていま

## C-PLATSの成功に向けて

した。私はそんなに年齢的にいいと思いませんが、それでも最近40人、50人の学生が覚えられない。グループワーク等のようなものも含めて考えるのであれば、4~5人が非常にやりやすいサイズかと。10人を超えるのが苦しいなというのがあります。少人数の授業というのが問題解決学習を全面に押し出すなかでこの大学では可能なかという問題ですね。人数が多いとどうしても盛んに先生がたが午前中もおっしゃっていたように、熱心な学生と人の器で何もしていない学生に分かれてしまう。それにわれわれ教員の目が行き届かない。それが一つです。少人数の問題ですが、

もう一つは昨日も発言させていただきましたが成績評価をどうするかという問題です。これはのちほどもお話される高村先生の昨日の報告に対する質問の焼き直しになるのですが、知識や技能だけではなく、それがいらぬというのではなく、能力や意欲を加味してお話をしている、私はそれに関してもいやいや喚起しすぎるのではないかなという。といいますのもみなさんご承知のように、小中のゆとり教育の問題があります。なかなかうまくいかないその評価はどう考えるかは別にして、うまくいかないので見直ししようというの最近言われていますけれども、ゆとり教育というのはご承知のとおり単純に学習内容を減らしただけではありません。それと同時に成績評価方法を根本的に変えて、絶対評価に変えたんですね。つまり今までの知識や技能の偏重型では困る。そこでそれに対して3つの指針を加えました。

それは関心と意欲と態度と言われています。その点も評価して成績をつけていくのだという話が行われていました。ところが、意欲でありますからまさにどこかで聞いたような話ですが、その部分の評価方法がなかなか客観的にはできない。教員の主観や裁量に陥ってしまって問題が大きいというお話をしました。テストでは78点と82点の学生がいたのに、78点の学生のほうが成績がいい。なんでもだと保護者が問いにいったところ、今申し上げた態度を加味しているのですよとおっしゃるのですが、ではその証拠を見せてくださいと言われてもそれはないと。主観になってしまうのです。それが一つ。

それであれば基準を明確にすれば、きちんとしたものをつくれればそれで解決するかなということになりますが、そうではなくて、意欲や態度に対して成績を付けるということももう一つ大きな問題があると言われています。ご承知のように教員の裁量が大きくなってしまいますので、生徒や児童

の側は、いかに先生の印象をよくするかにかけてしまうかなと。こっちはかりにいってしまっても教員の顔色をうかがうような形で授業全体が進んでしまう。ですから、そのために教員が言っていることに対して違うのではないかと気づいている生徒がいるにもかかわらず、それを発言しようとしません。そういう態度が逆に生み出されてしまう。今回のC-PLATSの中でクリエイティビティーですか、独創性という話がありましたが、その独創性を折ってしまふ。そういう問題点が出ていますので問題解決型の学習の成績評価方法としまして、意欲や態度を入れるのはおかしいのではないかと議論があるのです。ゆとり教育の中で、われわれはそのことを踏まえて今回のような基本お話についてのことです。どういうふうに対応すればいいか。少なくともゆとり教育で出てきた失敗を問わずにうまく進めることができるのかということを感じています。長くなりましたが以上です。

## ● 仲野一

ありがとうございます。では川窪先生お願いします。

## ● 川窪一

川窪です。私も急に言われて、特に資格とか専門性の立場からという話でパネラーをやってくださいということで引き受けました。私はご存じのように建築を教えています。うちの建築の売りは社会文化学部時代から文科系で学ぶ建築という視点でやってきています。これはある意味、非常に高校時代、数学とか理科を苦手とした学生にうけまして、今年メディアに変わってから1期生が出るわけですが、当初80名くらいの建築をやりたい学生が1年生に入ってきました。それで資格と言う観点からしますと、だいたい1級建築士を受験したものの、得たものが20人です。その中に2人ほど韓国からの留学生も含まれていて20人です。4分の1くらいに減ってしまっている。これ先ほど水口先生がアニメのほうに回ってきた学生がいるという話をされましたけれども、おそらく建築を目指してさまざまな建築の専門性の強い科目についていけなくて、そちらのほうに回った学生ではないかなと思います。

しかしながら、資格を得ただけでなくてメジャーという観点からいきますとこの間の教授会資料に建築のメジャーを志して達成した学生がたしか92.1%とすべてのメジャーの中で最も高い数字を示しておりまして、これは私からすると非常に喜ばしいことと考えておりました。しかしこの原因を

考えておりますと、ある意味資格がらみで国交省から言われているこれをやらないと資格を出さないという強い縛りがあったから、強制的にやらせてきたという、中学高校とちょっと方針や考え方が違うことが原因ではないかなと思います。建築ばかりでなく、マンガとかアニメとか、今日のパネルディスカッションにおいては、大手前の一つの売りと言いましょ、資格というものを表に出さないと学生集めが苦しいという現実がありますので、出さざるを得ないですけれども、社会というのはこのリベラルアーツの中において、資格を取得するということはどういうふうに位置づけられるのかというご意見をみなさんから聞きたいと考えております。

それから、C-PLATSということから、この建築を考えていきますと、建築の実務に就く時はこのすべてが必要なと思っております。問題解決力、これ顧客との対応ということになりますと、営業をやろうが設計をしようが、あるいは現場管理をしようが、すべてこれで成り立っております。他の職業においても問題解決力は要求されるので建築だけではないと思いますが、建築の立場から考えると、これがなくてできないとなってしまっております。低学年のうちから高学年にかけて、システムとして建築でどのようにこれまでこの問題に対処してきたか。実はこのC-PLATSの表を見た時に、われわれはすでにやっていることが4つありましたので、このあたりを紹介しながらこれからどういうふうに行っていくのかが学んでいきたいと考えております。

#### ●仲野一

ありがとうございます。では廣田先生お願いします。

#### ●廣田一

廣田です、よろしくお願ひします。

私のほうからはC-PLATSを成功させるための、全体像としてどんな風に計画するか、盛り込んでいくかということの一つの提案でありますけれども、学生部長ということで常日頃から課外活動等にかかわっていますというか、そういう立場ですので、成果概念ですね、課外活動によってどのようなことが求められるのかということについてお話しします。

午前中の発表にもありましたように、学生は能力レベルの格差が非常に大きいと思います。そういう意味でこれは芦原先生の発表にあったかと思いますが、一律の教育が非常に難しいかと思ひます。一つのテーマを設定して、たとえばキャリアデザイン、現在のフレッシュマンセミナー

ですね、その中である課題を与えても、もうすでにその課題で求められている能力というのを追い越した学生もいますし、まったく半期、1年やっても成長がいかかなものかという学生もいます。授業でするので基本はそのクラス全体をどのようにするかを考えないといけないのですが、そのあたりで非常に難しいなということが一つあります。

それから、先ほど座長のほうからこのC-PLATSの取り組み、それぞれの特徴を生かしてという前置きがあったかと思うのですが、授業によっても授業の内容というか分野によっても専門性によっても性格、求めていることが違うと思います。当然のことかと思ひます。そういう場合に、すべてのことを課題として結果を出すことは非常に難しい。当然だと思ひます。しかしそのC-PLATSというのは1つのことだけではなくて、1つの能力だけではなくて3つ4つの能力が連携したリンクしたなかにあるものだと思いますので、そういう意味でその授業に合った何を中心にその能力を高めた方がいいのかとしっかりと授業それぞれの性格付けを共有しておかなければならないと思ひます。

それと4年間かけて出口に向かって達成しようということなのですけれども、就業力を考えるとこれは3年生の秋学期に達成できてないといけないと思うわけですね。そうするとすべての学生で同じということにはいかないかもしれないけれど、やはり目標の設定というのは3年でつけさせるという、何らかの実力をつけさせるというプランが必要かと思ひます。

2月10日にこれら学部改革についてですね、学生懇談会というのを開催しました。そこには22名の特に2年生、3年生の学生が集まってくれたわけですね。その中で今の大学授業について、カリキュラム、あるいは学生生活についてどのように思うかなんかということをそれぞれディスカッションの形式で発言してもらったのですが、そのなかで一つたとえばユニット自由選択制というもの、ユニットという今回のカリキュラム改正でユニットが3科目くらいの構成になりましたけれども、ユニットは原則として全部取らなければいけない。そういう場合に全部講義科目だけではしんどいという発言がありました。でもまた全部のユニット内の科目が同じ形式の授業形態、すべての科目が毎回レポートを要求するとか、課題を要求するとかになるとこれは学生もたまったもんじゃない。ある意味で集中できない学生も出てくるかと思ひます。そうなるとユニット内でバランスよくですね、これは演習を入れていこうとかそのようなす

## C-PLATSの成功に向けて

ね、一つの科目でなくグループの科目でもって授業で大きな目標を達成できるように仕組んでいくとか。

それから先ほど野波先生の発言にもあったように、コア教育だけではどうしようもないことです。そのためには全体を3年間でどの程度まで達成するのか目標設定をしっかりとデザインするということがまず必要ではないかと思っています。学生生活についても後で話しますけれどもとりあえずのところ。

## ● 仲野—

ありがとうございます。では高村先生お願いします。

## ● 高村—

はい、始めて30数分経ちますが、ずっと私が何を考えていたかといいますと、何を話そうかということではなく、先ほどご紹介いただいたときに立ちあがってあいさつをしておりませんでした。たいへん失礼をしたなということをずっとお話しておりました。たいへん失礼いたしました。そのうえでお話させていただきますが、昨日私、リベラルアーツのC-PLATSということで解説のようなことをさせていただきました。そこで重要な質問をいただいたのですが、基本的にこのC-PLATSについては賛否両論中身に関してはいろいろあるかと思いますが、この言語ができたところで法律がまだない。そういう状態がC-PLATSの現状ではないかと思っています。つまり私が昨日申し上げたかったのは、能力を身に付けさせることを表にしようとしながらも、成績評価は知識でつけるというそういったねじれたことが本当にそのまま許されるのかどうかということを話題提供したわけです。そうすると当然のことながらその能力も成績評価の中に組み入れなければいけない。じゃあそれはいったいどうするのか。まずそこから考えないといけないということですよ。それで大西先生の質問にたどりついたのではないかと思います。これは今後本当に後付けのようになりますが、みんなで議論していかなければならないことと思います。

同じように、先ほど野波先生がおっしゃった講義ですがこれまでみんなやってきたわけですね。たとえば私がロジカルシンキングのグループで勉強させていただきまされたけれど、ロジカルシンキングをどう教えるかということに興味をもった人の集まりなのか、ロジカルシンキングがわからないからそこで勉強しようと思った人が集まったのか、みなさんのグループもそのような気持ちの方がいろいろいっちゃった

のではないかと思うのですけれども、ロジカルシンキングもそれを意識、学生にさせることはなかったけれども実はやってきたよという先生がたがたぐさんいらっしゃるのではないかと思います。まさにロジカルシンキングそのものをまったく無視してレポート書かせるとか論文を卒論を書かせるということはあるにわけて、気が付かないうちにやってきたんだけれどもこれからはそれを体系的に、意識的にやっていこうという一つの取り組みではなかとというふうに私が解釈して解説をさせていただきました。

ただまだまだよくわからないのは、この能力10段階がありますがそのレベルの授業をしますよという位置づけなのか、この授業を受けたらこれだけの力が身に付けられますよという数字なのか、それとも最低これだけは身につけなきゃいけない、またはこれを目指すという意味なのか。その辺に関してきちんと意識が統一されなければいけないと思いました。そもそも、先ほどのロジカルシンキングのところと同じ話しになるかもしれませんが、この10の力やC-PLATSですね、これに関して学生に理解させるのは難しいというご意見がありましたか、そもそもこれを学生に理解させる必要があるのかないのか、われわれが教育のなかで意識しておくべきことなのか、学生にPはどういう意味ですよと覚えさせるのか。そこをきちんと整理していかなければならないと思います。料理にたとえて言いますと、食べる前にこれはどういう食材を使ったかというとかイヤになりますね。まず食べてうまいから、これはどんな調味料が入っているとか、そういうふうに説明するとなるほどなど、先に能書きから入っていくとかイヤになってしまうかもしれません。そのへんのように学生にこれを浸透させていくのがということとはよく検討しなければならぬと思っています。

またカリキュラムを作る上で当初から疑問に思っていたことは、すべての授業ですべての能力を身につけさせるのか、それともユニット単位でその能力が網羅されればいいのか、先ほどの廣田先生のお話とよく似ていますけれども。カリキュラム、プログラム単位でその能力が網羅できていけばいいのか、そのへんをきちんと検討していかなければならないと思います。少なくともユニット単位で授業を取りなさい、一つ一つの授業じゃなくユニット単位で履修しなさいと言っているのに、なんで一つ一つの中に全部入ってくるのか。それがお互い補い合うからユニット制でなければいけないのか。そういうところに関してみんな納得できるような組み立てになっていなくてはならないというふうに感じまし

た。他にもいろいろありますが、思いついたのは以上です。

#### ●仲野一

どうもありがとうございました。みなさまお聴きのようにバラバラな意見とありますが、いろいろな観点から出していたので、まともながら焦点を絞ってディスカッションに入っていきたいのですが、なかなか難しいなと正直感じております。確認をしたいと思います。

まずプロジェクト、PBLに関してプロジェクトの重要性。プロブレムだけじゃなくプロジェクトが大事なじゃないかという意見が出ましたし、複数の方から評価についてですね、この評価も観点は2つあったかと思えます。一つは私たち教員側のすなわち今までフレッシュマンでやってきたさまざまな試みというのがある意味検証評価された上に乗っかってこの新しいC-PLATS2011というのが乗っかってきているのかどうか。ひょっとしたらそこで分断されていて少し乱暴な言い方をしますが今までのものはなかったものになっている。けっしてそんな意識でなされているとは思いませんが、今までのものは今までで一応終わりです。新たにC-PLATS2011ということと始めるんですよというニュアンスを強く感じられている方々がたくさんおられるという意味なのではないかと思えました。今までやってきたものの今年度までの積み上げを、効果測定でもいまいましようかそのあたりの問題点が出たように思います。

それともう一つはC-PLATSないしはPBLに両方に付随することだと思いますが、成績評価、採点というものをどうしていくのか、ましてや態度とか意志とか能力と名のつくものはどう評価するのか。知識であれどだけものを知っているかをはかればいいわけですが、それとは違いますよというご意見が多数出ていたように思います。それからC-PLATSを効果的に実践していくのであれば、クラスの人数のサイズの問題がありますね。私も100数十名の授業を毎年担当させていただいておりますけれども、それを振りかえてみますとC-PLATSを特に意識して何かやっていけるかという、一番最初の小森さんのお話に戻りますが、学生一人一人のフィードバックなんていうのは、100数十名に対してやろうとしたらこれは不可能に近い話の様に思います。しかしゼミ単位であれば、それも3年4年のゼミですけれどもできるかもしれない。しかしこのキャリアデザインのクラス25~6名ですね。そしてじっくりと彼らにフィードバックしてくとすると50数時間取られると。そういったクラスのサイズ

の問題もあるかと思えます。それから授業ないしは教員の持ち合わせている特質に合わせてC-PLATSの項目を考えていかなければならない。それがひいてはユニットの塊でC-PLATSの完成を目指すのか、一つ一つの科目が全部C-PLATSの項目を網羅しているのかということもあるのではないかとご意見が廣田先生、高村先生あたりから出て来ていたかと思えます。

これは一つ一つ議論というのもできるかと思いますが、まず6人のパネリストの先生がたにお伺いしたいのは、評価のあたりから何かご意見ありましたら。どなたにという指名はいたしませんけれども野波先生、先ほどからもうちょっと言いたそうにされておりましたので、評価特にC-PLATSに関しての成績評価に関して何かございましたら言ってくださいますか。今すぐに出ないときは川窪先生、尾崎先生あたりにパスをしながら考えていただいてもよろしいですが、尾崎先生も少し補足していただくことはございますか。

#### ●尾崎一

成績評価で私が申し上げたようなことについてですか。小中学校なんかの話しを聞いてるぶんでは、評価に態度や意欲に対して客観性を持たせようということで、全国的な標準テストを考えるという話もあるのですが、具体的にどうしていくか、大手前の単位だけでそうした基準をつけてもどこまで効果があるのかと思えますし、もっと大きな取り組みが必要なかなと思います。だから昨日も申し上げたように、そう性急にできるものではないだろうなと。意欲や態度まで含めて学生の成績を付けたら時間がかかる評価になりにかたねないわけですから、慎重にも慎重さを重ねていく必要があるのではないかと思います。

#### ●仲野一

どなたかいかかがでしょうか。

#### ●川窪一

私はですね、建築は実習科目が多く、特に設計製図演習というのはすべての講義科目の内容を集約して、作品をつくるというものだと考えています。ところがうちの学校の場合設計製図演習のかなりの部分を非常勤講師の方に依頼しているということがございまして、1年生から4年生まで作る科目があります。作品を作るうえですべての先生に私のほうからお願いしているのは、添削をしてすぐに学生に



## C-PLATSの成功に向けて

返して、目の前で添削の結果を事細かに授業中に話してくださいとお願いしています。それで学生も最後の最後にこれは3年生と4年生になっちゃうと作品の数が少なくなるのでやりにくいのですが、1年生の場合は最初に書いた図面、といっても線の練習や文字の練習なのですが、これを毎週毎週やらせていまして、最後の作品と比べてみてごらんという話をしています。そうしますとやっぱり伸びている人間は非常に全体的な評価からすると低いのですが、たとえば最初の4月よりよくなっている、こういうところで最後に評価してくれと各先生がたにっていますし、これが学生が非常に納得しているのではないかなと感じています。上級生におきましても添削を入れて、それで伸びを見て。私はそういった教育方針です。

あとですね、資格という立場からいいますと、うちの学校から建築士がそれなりの数、それなりの数といえますと資格をとった人間の数からいいますと、もちろん他学の工学部の数と比べますと少ないですけども、1級建築士がすでに6人ほど、十数年の歴史で排出しています。この資格を取った学生を見ますと、学生時代に抜けていたというやつではないですね。意外にあれっと思う学生がいます、彼らを建築業界に動機づけを持って就職させて就職してそこで社会人として成熟していった、こういう資格を取得していった。学校で勢いをつけて社会に出てから伸びたところがありますので、必ずしも学校の成績と一致しないと感じています。

## ●仲野—

はいありがとうございます。野波先生ご意見あるようなのでお願いします。

## ●野波—

私はとくにいい案があるわけではなく、フレッシュマンセミナーでPBLのインタビュープロジェクトをやったときに成績評価がグループ単位でグループ責任だからグループで手をつけるというときに休んでいる学生がいたりとか、負担が違うのと同じ点数になるのが問題になっていて、本当に一番難しい問題だなと思っています。

今回C-PLATSのシラバス、昨日これに新しい範囲も合わせて入れてみたりしても、到達目標と学習成果というところにC-PLATSのレベルが書いてあって、それと成績評価が別にある。C-PLATSと成績評価の関係が不明確な

んだという、これも問題に。いい案ではないのですが。

## ●仲野—

小森さんがさっき言われたダブルスタンダードではないけれど、GPAが1.4なのにC-PLATS平均で3という事例や現象が出てくる。小森さん、キャリアサポートで学生を見ておられて、学生の立場からどういったところを学生は評価してほしい、見てほしいというふうに思っているんでしょうか。ちょうど3年生くらいになると彼らは煮詰まってきましたね、就活毎日で自分の良さというのが自分ではなかなか理解できていない若者もいると思いますけれども。

## ●小森—

がんばったという成果というのはゆとり教育の弊害かもしれませんが、がんばたらどうにかなる、自分はがんばってるよというのを認めてほしいというのが多い。ただ就職とか社会とかは結果が求められますので、そこが社会と教育のギャップかなと日々感じております。先ほど成績評価のところでも努力とか意欲とか入れると出ましたが、基本的に僕は反対で、成績評価は点数化できる部分でレポートとか筆記試験とかそういうもので評価すべきだと考えております。社会はそうなので。

## ●仲野—

ではがんばったよというプロセスですね、先ほど川窪先生も以前自分が書いた図面と比較させて自分の中の伸びを見たとおっしゃったのを、プロセスを評価するとか、育ってきた姿を活かすとかいうか、そういうことは尾崎先生が問題意識を持っていらっしゃる意欲とか態度とかいうところにつながると思うのですけれど、それをC-PLATSではあえて数字という基準で評価し、かつ、レポートやペーパーテストの成績も用い、そして自己評価もしているわけですよね。学生たちは、それを携えて就業力という名の下に社会に出ていくことをやるわけなんですけれど、私が学生であれば戸惑うんじゃないかと思うのですが、大きくうなづいてくださった廣田先生、そのあたりをどうお思いですか。

## ●廣田—

たとえば卒業要件ということで、C-PLATSの評価を卒業要件に入れようということで別に決定しているわけはありませんがそういう提案がありますよね。昨日の

C-PLATSの説明の時にも出てきたかと思います。そうするとダブルスタンダードどころか、124単位、GPA1.5、C-PLATS3以上。どうするのかという感じを受けます。そのあたりはですね、対社会的にみても学生にとっても納得できるそういうものを出さなければいけないと思います。

これは私が個人的に考えることですけれども、さっき選択のデザインが必要だと申しましたけれども、評価に関しても対社会、社会から見たタイプの授業というのはその授業の科目なり全体の授業を理解できているかということに対して君は優だねとか不可だねとかそういうふうな評価がされると思うのですね。C-PLATSはもちろん基準があってそこまで到達してほしいということですが、やはり個人の成長の結果が客観視できる自己評価できるところが一番大切なところだと思いますので、やはり評価に関しては別に分ける必要があるのかなと思いますがいかがなのでしょう。各科目にとってその授業の目的ですね。その授業はここまで振り返りなくてはいけない。やっぱりそれが一番大事だと思います。それは通常の評価なのですがもうひとつ授業という一つのテーマに沿ってあなたはこれくらい努力できましたね、できませんでしたねという評価が必要なのかなと思います。そのためには一番親切なのは数字の評価ではなくて本当はフィードバックしてそれを常に答えてあげるといふ体制が必要なのかなと思いますけれども、それよりも数字をとということですので、まあちょっとそのあたりが難しいのですけれども、別の評価がいいのかなと私自身考えています。

#### ●仲野一

ありがとうございます。今のお話を聞いていますと、ユニット全体でC-PLATSのさまざまな項目をバランスをとりながら補っていくといえますか、相互的といえますか、そういうお話が先生の中から出て来ていて、私は今回の研修でC-PLATSの勉強をさせていたでなかで、ユニットをすごく意識しては話しをたぶん聞いていなかったように思うのです。一つ一つの科目、授業ごとのC-PLATSの心配ばかりしていて、そうするとコア教育のものだけですね、ある意味グルーピングされているのは。そこにすべておんぶにだっこで話しが昨日はいついたように思うのですが、でも本当に全学的に全科目あげて、専門科目もコア科目もかわらずすべてがC-PLATSに向かいながら動くんだとなれば1個1個の授業の充実はもちろんなのですが、ユニットの中

のC-PLATSを実現していく結びつきのようなものをもう少しと議論しないと。その意識というのはすごくあるかというところとそのあたりはどうかと思うのですが、高村先生そのあたりいかがでしょうか。ユニットを強調されてお話をしてきたように思いますが。

#### ●高村一

まさにそのとおりです。本当にそうですねとしか言いようがないのですね、今のところ。つまりいろんな問題点がお話の中で見えてまいりまして、私もそう言った意味では各先生がたと同じような考えにしか今のところありません。いろんなところで私が出すぎないくらいお話をさせていただいておりますので、みなさん当然私がこれをさせているかというふうなことを思っていられるかもしれませんが。私自身これを勉強中のごさまして、全く1から勉強するという立場でございますので、いろんな問題点を洗い出して、まず成功に向けてということですので、そのような姿勢で臨んでいるところでございます。

#### ●仲野一

何も責任をかぶせようと言っているわけではないのですよ。ただユニットに対しての意識、自分が担当している科目についても一致させていくという意識と、そのあたりをうまくつないでいかないと全学的というのはなかなか、本当に自分の担当している科目だけに気持ちがいくというのは違うと思うのです。だから私は野波先生が先ほど問題提起されたコア授業のほうにあれもしてほしいこれもしてほしいと言っていたことは課題をたくさんいただきありがとうございますとお礼を言われたのですが、あれはかなり自分の気持ちを抑えて言われたのだと思います。結局はコア教育だけではできないということなのだと思いますけれど、そのあたりもう少し深めていただけるようでしたら野波先生お願いいたします。

#### ●野波一

そうですね、先ほど言った通りなのですから、たとえばちょっと話が変わるかもしれないPBLの話なのですが、PBLは授業でもやっているし、インタビュープロジェクトでももちろん、フレッシュマンセミナーでもやっている。でも学生からの印象としてこんな小学校からやってきたのと同じだという感想が出るということは、そこが問題意識だ

## C-PLATSの成功に向けて

と思うのです。というのは、小学校でやっているのと今やっているのとは形は同じであっても何か違うはずで、それは何かというと知識延長型、知識の積み重ねだとか情報量の多さのなかで分析できる力が小学校と今とは違うのだよという部分を、そういう意味ではPBLの中もそうですが、本をしっかり読んでいろんな情報を集めてその中から分析するという、基本的なりベラルアーツのちゃんとした勉強をしようと考えています。その部分がないと、浮ついた小学校と同じになってしまいます。学生から小学校と同じだよと言われるということはそこで考え直さないといけない。私たちのやり方がうまくないと、同じことを繰り返しているという問題としてきちんととらえなければいけないと思っています。

## ● 仲野—

ありがとうございます。さて先生がた、「もうちょっと話したいことを用意してきたけれどまだ言い切っていない」ということがあれば少しお話ししていただきたいのです。なぜなら客席に座ってくださっている教員の方々、職員の方々からご意見を頂戴したいと思っていますので。はい、では尾崎先生よろしくお願ひいたします。

## ● 尾崎—

今のお話について一つだけ発言させていただきます。C-PLATSを個々の科目ではなくユニットとして見ていいのだというふうな発想を転換させてくれるご発言がありましたので、それで申し上げさせていただくとすれば、われわれであればメジャーの上に卒業論文であるとか卒業制作であるとか、そういうものを積み上げて、その全体でC-PLATSを考えることであれば、川窪先生も熱心におっしゃっていましたが、知識がある程度蓄積したうえでないと独創性も創造性も生まれにくいのではないかと思います。その全体の中でC-PLATSを構成しろというのであればさすが明確にビジョン化できる。そうではなくてたとえば1年生の初年次の教育だけでC-PLATSをある程度スペック化しろという少し困惑する。

## ● 仲野—

今は私もすぐくびんとききました。メジャーユニットで一つの形を目指していくというところの土台に知識がきちっとあって、そこに送りだしていくところの前段階の助走期間というか準備期間をコア教育でしっかりとしていただきながらメ

ジャーユニットにバトンタッチしていただいて、そこでもC-PLATSをしっかり目指していくという考え方でよければ。

あの先生方はいかがですか。はい、廣田先生お願いします。

## ● 廣田—

あの、補足になるかどうかわかりませんが。先ほどお話ししました2月の学生懇談会で、学生の発言の中にありましたけれども、知識を90分やるだけの授業があってもいいと言っていました。それはかなり勉強するという自覚をもった学生だと思いますけれども、しっかりと知識を身につけたいと次のステップに上がったときにわからない。具体的に何をあげていったのは、知識の授業とユニットかな。もう一つはグループワークをするような授業だったのですが、知識を知っておかないとそのグループワークに入ったときに何をやっていいのかわからない。だから知識だけの授業があってもいいのだ、というか、それもしよということ、あまり1つの決まった形になるといやだなといった発言があったということ。

## ● 仲野—

ありがとうございます。たぶん知識で入れたものをグループワークで出して使いこなしていくという意味合いなのでしょうね。それはとてもいいご意見をいただいたと思います。あと先生が大丈夫ですか。はい、高村先生お願いします。

## ● 高村—

思いつきで申し上げます。このC-PLATSの図がありますね。たとえば1年生レベルではまず社会人として当然な社会的責任やチームワークについてきちんと身につける。2年生の段階では思考基盤の4つの力を身につける。レベル300になったらそこには就職活動をしなければいけない行動力といったものが必要になってくる。その行動基盤というものをさらに身につける。そして最後に問題解決力を付けて社会に出る。このような順番ですとわかりやすいし、やりやすいような気がするのです、完全な思いつきですけれども。ところが1年目からこうだということになると、先ほど言ったように運転技術はあるけれど車がない、だから運転できない、そういうようなことになってしまうのではないかと心配がござります。けてこれがいけないのではなくて、たとえばこういうふう考えるのかなという提案がもっと

できればいいと思います。

#### ●仲野一

ありがとうございます。私も感じたのは一番最初に小森さんがプロブレムも大事だけれどプロジェクトもおっしゃったのですがチームワークはプロジェクトだから、やはり土台のところでやらしておきたい。プロブレムというのはやはりすごくレベル高いところに目指すものという位置づけで、思いつきと先生おっしゃいましたけれど、何か腑に落ちるようなお話であったかと思えます。あと先生方がいいかでしょうか。はい、野波先生どうぞ。

#### ●野波一

すみません、実はさっきも申しあげたのですが、C-PLATSシラバスという案、今回簡易版になりましたけれども、実は昨日一応埋めてみました。埋めた時に一番最初に書いてあったのが、事前学習と復習のところに、学生が90分の授業に対して4時間の事前学習復習を行うことを確実にするための方法と書いてあるんですね。ということは1科目で4時間前後、これが私どもに言われている単位の基準ですのでもちろんそのまま、たぶんこれからはタイムにも公開されるので、4時間というのを考えた場合、実は学生で20単位までですので、実際には1日2個、2科目あったら8時間自習をしないとイケない。となるともちろん当然ながら学生はアルバイトなんてやっている時間はないが、そこまで本当に真剣に全科目で4時間の課題を出してやっていこうとしているのか。

そして学生を育てるのだという気持ちでみんなこれに同意をして4時間の課題を出してこの学校に来たらアルバイトもできない、でも4年間で本当に育て上げて、だからアルバイトできなくても次にせ次のことを考えて勉強するのだよという具合で先生がたがやるのか、本当にこの4時間で考えていいのか。キャリアデザインで考えている4時間で本当に入れていいのかなということもみなさんにも聞きたいし、それだったら学生の今の時間割見てたら1時間目から5時間目まで全部埋めて他の日はないとか、そこから学生に自習指導をしないとイケないと思います。本当に1日2コマ以上は絶対にムリだよという自習指導と生活習慣というか、キャリアデザインの先生はそこまで指導しないとイケないということになりますので、そのあたりみなさんどう考えなのか。妥当な点で2時間くらいにしよう平均2

時間くらいにしようとか、コア教育は4時間くらい一回やってみようとか、そのあたりは実際に切実な問題としてこれに書いてあるので、ちょっとお聞きしたいなと思いました。

#### ●仲野一

ありがとうございます。なんかとても最後に大きな問題に気づかれて、2科目8時間、これは大変なことですね。われわれ教員はその覚悟がないと、学生も覚悟をもって大手前でしっかり勉強していつくれるかというところに結局なってくるかと思えます。せっかくですので先生がたにもいろいろお伺いしたいと思います。まず一番最初にお願いしておきたいのが、私たちは何か権威をもって座っているわけではございませんので、ご質問くださったも、正解をお答えできる立場にないと思います。ただそれについては問題意識を共有する仲間として質問を投げかけてくださるとわれわれも答えやすいかと思えます。たとえば私・仲野であれば、「私もそう思います。大きな問題だと思うこういうふうにしていけばいいのではないのでしょうか。」というふうにはお答えできますが、善悪の判断になると私たちはそれにふさわしい立場ではございません。できましたら何か問題提起なりご質問なりしていただいた中でパネリストや私に投げかけていただいて、あなたならこれはどう思いますかと問いかけてください。その中でなんなり今思ってくださいるところをお話くださったらと思います。できるかぎりいろいろなご意見をお出しただいて、そのお出しただくということが問題共有の助けになるかと思えますので、どなたでもけっこうです。はい、では藤田先生お願いします。

#### ●藤田(道)先生一

すみません、すぐに手を挙げさせていただいたのは意見じゃなくて確認なのですが、この認知がそのまま進んでいくと、ひよとすると違うのかもしれないという気がかりな点が1点あります。些細なことかもしれませんが、野波先生なのですが、インタビュープロジェクト、こんなの小学校からやるよという、その根拠は2月の教授会の後のエンバンスの振り返りのときのお話をもとにおっしゃっていたのでしようか。

#### ●野波一

そのときにも少し出ていたと思いますし、他の先生がたからや他のところでも聞いているので、複数で聞いたので

## C-PLATSの成功に向けて

そういう話をしました。

●藤田(道)先生一

こんな小学校からやっていたなんて違うプロジェクトで言われたというのは私はその場で聞いております。インタビュープロジェクトに関しては相対的に学生のあれが良かったんですね。廣田先生もそれにかかわってくださっていますが、横上に並ばれている。このC-PLATSを考えるうえでもおもしろいなと思いましたのは、単純にプロジェクトとしてインタビューしていてということよりも、学生がインタビュープロジェクトを通じて、けっこう評判が良かったことは何かということ、エフエースタッフの先生がた同じ時間内に5クラスあるエフエースタッフの方々のところへそれぞれ自分のクラス担当じゃない先生のところへ行くというプロジェクトだったのですが、そのときに先生の日ごろ知ることができなかった生の研究上、教育上、すごいなと思ったということを開く心に触れて、それをまとめたグループというのはすごく良かったです。結果もすべてにおいて、それをクラス内、学年全体で、クラス内では全部発表いたしますよね。その中で一番みんながいって学生総合評価であげられたのを全体集会でやったのですが、そこらへんは学生みんなわかってきていたというか、その発表で同じ1つのクラスで4つくらいに分かれてやっているのですが、そういうのに触れて、すごかった、あの先生こういふふうに思っているほど考えさせられたという点をまとめた学生のグループが全体総合評価でやっぱり良かったんですね。単にうまいというだけではなく、これはやっぱりこのプロジェクト、やった甲斐というのがあるのかなあというふうに思いましたので、実際振り返ってちゃんとした会議のあの場では違うところで言われていたのでもっと修正を。

●野波一

インタビュープロジェクトはと言ったと思っておられたら誤解です。インタビュープロジェクトはあのとすごく良かったねという反省会の中で出て、今回も入れる予定です。すごくいいプロジェクトレストレーニングの典型的な例だと思っております。で他で聞いております。そこは別です。私の中でそのような誤解があったかもしれませんが。

●藤田(道)先生一

あとは意見としてはいろいろなことがあるのですが、それ

はのちほどにさせていただきます。

●仲野一

はい、ありがとうございます。誤解が解けて何よりでした。インタビュープロジェクトはとても成果があったということで、来年度も続けてなさるのですね。私も1回インタビューしていただきました。やってもらうほうもおもしろかったです。あと、ございますか。

はい、お願いします。

●山下先生一

私のこの2日間ずっと参加させていただいたのと、さっき仲野先生含め7名の先生がたのお話もうかがい、感じたことでもよろしいですか。

●仲野一

はい。

●山下先生一

まず一つめに、ほとんど先生がたと共感をという意味での意見なのですが、C-PLATS10のものを各学年の重点目標だと段階別に整理し直す必要がある。そしてそれが教員全体の意識徹底をまずしなければならぬと。でないとそこから評価の問題が出てくるだろうと。これは高村先生も廣田先生もおっしゃっている。ただ先ほどのメジャーの中でというものではなく、私はみんな違ってみんないいと思うのですよ、大学というところは。そこまでガチガチと最初から決めごとを小さき部分からしていくと身動きが取れなくなって、日常の瑣末などで本末転倒にはしないかというのが今回の大きな、C-PLATS全学で取り組むよというとても大きなプロジェクトで、これを性急に、いつからですかと、そんなこと言っていたらいつまでもなのですけども、まずは今日は意識統一。みんながC-PLATSという言葉を使うように、聞いたよね、知っているよそれというレベルでもいいのかと私は受け止めております。まずこの意識徹底、枠組みというものを段階で、10のC-PLATSの枠組み。これも1年生でどれを重点的に力を入れるのかという大きな部分の枠組みも必要だろうと。先ほどからPBLと出ておりますけれども、結局昨日の話しも一つとまとめていくと、3年生あたりが一番PBLを導入するのが、もちろん1年生のインタビュープロジェクトの話も出ていますけれ

ども、3年生あたりが最適な、人数もそうですし、最適な場所なのかなということを感じました。

2つめに評価なのですが、尾崎先生がおっしゃった意欲、関心、態度。ゆとり教育のね。これは私少しこの評価の問題、質的評価と言うのをやっていたのですけれども、一つにはこの大学でもやっている見えるかですね。ポートフォリオ評価という、つまり先ほど川窪先生がおっしゃった1年生のときのそれ、3年生のときのそれ、そのプロセスね。仲野先生もおっしゃった。そのプロセスを自分で確認するためにはやっぱりそれを積み上げたブックというか、ポートフォリオがあるわけですね。それが電子になるのか紙ベースになるのか作品ブックになるのかなにかわかりませんが、そういったポートフォリオ評価というのは必要じゃないかなと、そうすると自己評価もできる。確かに1年のときはヘタやったと自分で思うと思うのですよね。やはり成果物を自分で見てそこから振り返らせるということはPBLもそうですし、上位的な意欲、態度、関心評価のときに絶対不可欠なものではないかと思えます。先ほどから問題点でおっしゃったように数値に表わす、なんでもかんでも数値、それこそダブルスタンダードじゃなくトリプルスタンダードになるようなことだけは、矛盾がどんどん出てくると思うので、数字遊びになっていくと大変なことになるのではないかという懸念も。コア教育専門委員会に2か月くらい前からかかわらせていただいている懸念しているところでございます。

それとも一つ最後、長くなりますけれども、計画的な取り組みということで、廣田先生が学生部長だから申し上げるわけではないのですが、たとえば1年生であいさつしようとかマナーとか出てきましたけれどももともと全学的な、たとえば小学校だったら1学期の目標ということで登校口の黒板に書かれていますよね。廊下を走らないとかあいさつしようとか。そのセメスター別の目標というものを学生も職員と教員と一緒に学内をそういふ目標を見える形で掲げて励行することを、もちろん学生部はやってくださっているのですが、それをもっと全学的な取り組みにしていってか、課外活動もそうなのですが、たとえば大手前祭とか学内イベントも企画を募集するとか、学生部だけにその時期がきたら運営しているのもっと教員が一番学生のそばにいますから、うまくゼミ内で取り込めないかとかですね、双方向が可能なのではないかなと。もちろん地域ボランティアも含まれます。と思うのですがその前に一番最初に言いました段階ですね、各学年の重点目標みたいなものの意識、

認識というのですか、そのへんをまず全教員で明らかにしていくのが先決なのかなというふうに聞かせていただきました。

#### ●仲野一

ありがとうございます。今の藤田先生、山下先生のご意見を受けてどなたかございますか。

はい、お願いします。

#### ●廣田一

今度は学生部長の廣田としてお話しします。山下先生から学生部というのは学生課だけではなく全学的なマナーの取り組みというお話で進めてはどうかという提案がございましたし、先ほど午前中のところで坂本先生のリーダーシップですね、チームワークですか。どういうふうに育てるかということで、課外活動等で実行できるようにという話もありましたけれども、現状をお話させていただきます。

現在課外活動では課外活動委員会というものがございまして、これは素晴らしいリーダーシップを発揮している団体なので、地域の清掃や地域のボランティア活動にも積極的に参加していますし、先日リーダーズキャンパスという課外活動団体をまとめた50人ほどの合宿を2泊3日で行いました。そのときに課外活動委員会のメンバー20人弱10数名いるのですが、非常に全体をスムーズにしかも目標をもってきちんとまとめるだけの力をもっています。同じメンバーが半年前に合宿をし私も参加したのですが、そのときはなんとなく素質がありそうだな程度に思っていました。ところが今や彼らはそれだけの学生をまとめる力を十分に持っているし、スピーチをさせても10分くらい平気で話しますし、そのメンバーの中には阪神間の大学のコミュニティーがあるのですが、そのリーダーをやっている学生もいます。

大学祭は確かに貧弱ではあるけれども、昨年の桜祭以降ですね、その前から予兆はありましたが、地域の人がものすごくたくさん大学祭に訪れるということがあります。そこで見渡したときに、教員はほとんどいません。同じように授業に関しても授業内容までは知る必要はないかもしれないけれど、ここでは大体どのようなことが、授業が行われているのだということはある程度それぞれが把握しておかないととてもじゃないけれど大学全体で手を取り合ってC-PLATSをやりたいなんて無理だと思います。しかもこ

## C-PLATSの成功に向けて

こに非常勤の先生も含まれてくるということなので。しつこく言いますけれども、いろいろなことを共有するためお互いにコミュニケーションをしっかりとしないといけないということ、全体定義ですね。きちんとした計画をもって挑まない、これは絵に描いた餅になりかねないと思います。

## ●仲野—

ありがとうございます。高村先生、昨日食事の場で、言葉づかいの話していただきましたね。ちょっとみなさまにエピソードをご紹介します。

## ●高村—

とくに社会性基盤ということをどういうふうに身につかせるかということに関しては、やはり教職員みんなが学生の良きお手本にならなければいけないということを少しお話しさせていただきました。

自分の経験からいいますと、4月の初めに新任教員で着任と同時に教務部長になってしまったので、4月の初めに第一事務室の中に入っていったら、しーんとした感じなのです。朝は何か言わなければいけないと、おはようございますと言ったらちっと職員が見た。私のデスクがありますが、私が来る前から使えるようにしていただいていた、それが何か自分の立場を証明するものがないといけないのかなと思って、そのあと辞令交付式がありました。その辞令を示しながら、本日教務部長に着任しました高村です、と言ったら何人かの人が会釈をしてくれた。それが何日か続いて4月の5日か6日だったころ、事務局長に、「すみません私のことちゃんとみんなに紹介してくれませんか」とお願いしたのですが、「いや、もう知っているからいいでしょ」と言われてしまったのです。いやそういうわけにはいかない。ちゃんと行ってほしいと言って、ようやく紹介して下さったのです。政権交代時の大臣みたいな官庁に冷やかな目で見られた、そんな感じがしました。私のキャラクターをみなさんが好まなかったのかもしれませんがそれはしょうがないのですが、ただ社会人基礎力としてこういうこといいのかなと、社会基盤に関して、そのように思うわけです。前の学校では実習指導などのときは、質問が多いときには職員をカウンターの外に立たせて銀行のような感じでしていましたし、そこまではできましたけれどシャッターで入口が閉じられるので、まさに9時にシャッターが開けられたときに全員で立って、学生が入ってきたときに全員で銀行の

ようにいらしゃいませ、おはようございますとやったらどうかと、それはさすがに反対されて、実践しませんでした。本学の学生は時間前から出入りしてしまいますので、なかなかそういうふうにはならないですけども、そうやっていろいろ社会の体験を大学の中でさせる。そして教員が特に事務職員が学生の良きお手本になってもらいたいです。そのなかで昨日どなたかが発表されていました。学生が先輩に対しては丁寧な言葉を使うが教員に対してはため口。

では教員や職員は学生に対してどんな言葉づかいをしているのかと私は非常にいつも気にしています。東京でもそうです、子どもにものを言うような接し方をしていると、それで本当にいいのかと。相手の個人の人格を大事にするということもありますけれども、それ以上にあなたを大人として扱っているのですよ、だからあなたはきちんと責任をもった行動をしなければなりませんということになるわけです。ところが子どもに対して話すようにもってとひく言えば寝たきり老人と言ったらこれは怒られるかもしれませんが、そういう人に話しかけるようで本当にいいのかと。最初大手前に来たときは関西の風土はまだ違うのかなと思って聞いておりました。ある先生から「この野郎お前」みたいなことを言われたと学生が訴えてきたときに関西では学生のことを教員がお前ということはきつことですか、それとも言われてもそれほどでもないことですかと聞いたら、「お前」というのは別にかまわない。なるほどな、東京でそんなこと言ったら怒られてしまうなど。ですからそのへんの様子を見ていたのですが、どうもときどきこの話し方はどうかと思うことがあるのです。ですから少し堅苦しく感じるかもしれませんがそのへんは大人として扱うということをわれわれ自らがやっておかなければならないということ、昨日酔った勢いで申し上げたのを覚えてくださっていてありがとうございます。

## ●仲野—

ありがとうございます。だから私たち教職員も手本をしめさなければならないということをお願いいろいろ事例をひいてお話くださったのをちょっとみなさんにご紹介しておきたかったのです。私も夙川の事務室で必ずおはようございますと言うのですが、お返事が返ってきません、教務課のほうからは。総務課は返ってきますが、とても残念です。愛想悪いです。とくに夙川の事務室は、だからもっと温かく教員も学生も迎えてくださるような土壌づくりをしてほしいなど

いつも思います。だからだんだんあそこに行くのが嫌になるわけです。最小限しか行かなくなる。私は伊丹キャンパスが長かったので、伊丹は自分の庭のように今も思っている。ので親しみがあるのかもわかりませんが、身近なところから始めないと、C-PLATSなど立派なことを言ってもなかなかという気がします。ほかに、ギャラリーから先生がたからごぞいませんか。言いつばなしでけっこうです。松井先生お願います。

#### ●松井先生一

ちょっと座っているのがしんどくなったので立たせていただきました。昨日から、私はまだ直接的なC-PLATSに対する概念ができておりませんので、あえて聞き流していただきたいのですが、3つほど感想を述べさせていただきます。あえて挑戦的なことを申しますが、C-PLATSもこれは教授法であるはずなのですが、対象はもちろん学生ですが、学生がということあまり言い過ぎているかなというのが多すぎます。つまりはっきり言えば教え方にバラツキがあります。こういう言い方をすると語弊があるかもしれませんが、つまり先生がたの教える基準をある程度そろえていきたいというのがひいては学生を引き上げていく形になるということをまず忘れていないかと感じます。確かに私は主に専門学校のほうでありますけれども先生がたレベルではほぼ均一なので、教え方も均一です。そうするとそういった問題はほとんど起こらないわけです。そこがどうして起こるかという、つまりこのC-PLATSというものをみなさんが学習してそれを自分でかみ砕いてそれをどうやっていくかということをあえてやらなければならないからだと思います。さらに昨日から意見もありましたが、では積極的にC-PLATSをどうするのか。学生がC-PLATSのシンプルな中身は知っていてもいいわけですが、これほど複雑なもの覚えさせる必要はまったくないだろうし、もう一つは、進めていって軽く説明していったらいいのではないかなというような感想です。

それから2つめなのですが、昨日のお話の中で大西先生も言われてましたけどみなさんも、私を知る限り、たしかに日本の行く末は危ないかもしれないという意見がある。これはたぶんかなり脅しの部分に入っていると思うのですが、現在の就活時代に、アルバーノ大学の非常に素晴らしい教育法を参考にされたわけですが、ではアメリカはどうかんだということなのですが、アメリカの今年就職率はわず



か大卒平均で26%。一昨年は48%くらいだったと思うのですが、一気に下がっています。確かに日本は超氷河期ですが、アメリカはもっとシビアなわけです。つまり社会体験がなかったらほとんど会社に入れない。たとえば一番有名なグーグル社なんかで採用されている人はどんな人がいるのかという、アラスカ沖で石油流出のときにボランティアで活動した人を今年は採用していました。採用した理由は何かと聞けば、1万人のボランティアを東ねてやったからだという答えが返ってきたわけです。まさに今学校がやろうとしている知識偏重から本人が考えて行動するタイプの人間を求めていることだと思います。まあいならば就職率は決してこれ以上上がってはいかないだろうという前提のもとで私は考えているわけですけれども、しかしアメリカ型に移行していく過渡期になるのではと私は考えています。したがって早めにC-PLATSを取り入れることは非常に賛成です。ただ理解するという点に関して早急というのは難しいということ、先生方の認識、私も含めてですがあまり理解できていないのではないかとということです。

3つめですが、就職、就業力という表現だと僕は思うのですが、企業就職に関することといえば、これはたとえば、確かに企業に入れても基本的に出来上がっている人間、というかわれわれももともと知識偏重型の教育を受けてきた人間が、そうでない教育をしなければならぬわけですから、そういったことを前提に、もう少しその部分は練っていかなければいけないかな。教える子にだけ知識偏重をやめろというのではなく自分たちは知識偏重で育ってき



## C-PLATSの成功に向けて

たわけですから、そのギャップをどうするかというところをやはり取り上げるべきではないか、というのが感想でございます。

## ●仲野一

どうも貴重な意見ありがとうございます。あといかがでしょうか。芳田先生お願いいたします。

## ●芳田先生一

お疲れのところ感想も含めてひとこと。私が立つとまたクラブのことかと思われるかもしれませんが、C-PLATSを成功させるためにということですが、これどこにも授業のなかでというのはないのですよね。今回のプログラムの大きなタイトルは、これからの大手前大学C-PLATSの座標軸を据えてということですので、ということは教育というのは授業だけが教育ではなくて、学校全体の学生をいかに育てるかということが、大きなテーマで、最近は質の保証、質の保証というふうに教授会でもよく聞くのですが、じゃあどういった質の保証なのかというのを具体的に思うのです。

この新カリキュラムといいますか、3学部クロスオーバーユニット自由選択制に4年前からなって、これは僕の感想ですが、どういう質かという依存性の質を高めていった。先ほど高村先生がおっしゃっていましたが、どうも大人として18歳以上の青年としての扱いではなく、どんどん子ども扱いになっていっているような気がしています。久しぶりに今年度フレッシュマンセミナーを持たせていただきました。もちろんフレッシュマンセミナーのコーディネーターの先生がた、非常によくやっていたので、いろいろ遅くまで資料を作っていたのでわれわれに提供していただきましたけれども、いたれりつくせりというのが今年度の私の感想です。やはり昨日教務課長の森本さんがおっしゃってましたけれど、授業どうですか、教室どうですかと聞いてきて、その場では調べてどこだと教えているけれども、これからは教えない、掲示板に、自分でその情報を取って動きなさいということにしたいと言っていました。まさにそうで、痛い目と云いますか、それが痛い目かどうかわかりませんが、失敗したところから学ぶことも大切で。ひょっとすれば鴨がねぎよっているという言い方をすればわかりますね、学生の顔をみれば学費が学内を歩いているということかもしれません。でもわれわれそんなこと一つも考えないで授業や学生指導やっているつもりはないです。もちろん大きなところから見る

と学生たちの学費でわれわれは生活しているというのがあるかもしれませんが。

もう一つ言えば、われわれはどこを向いて実際にC-PLATSを含めて教育しているのか。学生に向かないといけないのではないかと。どうも最近思うのですが、学生でなく学生の先にいる親御さんを見ているのではないかと気がして仕方がないのです。ではなくて学生をわれわれがしっかりサポートし、教育をし、面倒をみ、鍛えるということをする、それはひいては親御さんの満足、喜ばれるのではないかと思います。それは野球部の指導を通して思っていて、ガンガン言います、ほろかすに言うこともあります。もちろんサポートすることもある。だけどそれだけ一生懸命頑張って4年間、もちろん途中でリタイアする人も何人かいますけれども、そういうところから頑張って出ていく。それが4年間大手前で過ごせてよかったなと思えて出ていく。これが僕は最大の使命だと思っていて、やはり大手前のサポーターをどんどん増やしたい。卒業した時にこんな学校いやだったと思っ出て行って、10年後20年後もそう思われるのでなく、やっぱりよかったな、行ってよかったな、やってよかったな、学べてよかったなというサポーターを作るべき。それが何十年後に回ってくるのではないかと思っていて、そういう意味では学生扱いというのを先ほど野波先生が小学校と同じだということをちらっとおっしゃっていただきましたが、確かにそういう声も聞こえるけれども、ではその中身、すべてお膳だしてどうぞという小学校と同じになるかもしれませんが、そこを考えさせるというのが大切ではないかと感じました。

もう一つは、学習支援というのはできる子もいてできない子もいる。非常に幅があるのでどこに合わせるか。この4年間はできない学生にスポットを当てていか、どう支援するかということが多かったのも、もう一本軸が必要ではないかとということ、プロセスと結果と、結果を求められるよりそのプロセスが大事ということだったので、プロセスは大事だと思います。でも結局結果が伴わなければそのプロセスもどうかって挫折してしまう。でもそこでどうわれわれがサポートしていくかということが学生の肯定感や、がんばったという自信へつながってチャレンジできることが教育なのではないか。それをC-PLATSでどう活かしていけるかなというのが今後の課題と思っ聞いておりました。感想でした。

●仲野一

芳田先生ありがとうございます。潮田先生が客席からは最後になりますので、先生よろしくお願ひします。

●潮田先生一

芳田先生とはほぼ同様な質問もごさいませけれど、考えも、学生にC-PLATSというものを浸透させる方法でございませね、各科目の中でそれぞれに先生がたに託されるということもあひませけれど、全体的な構想として何か今後に至るのかどうかということ。それから学生がフレッシュマンで経験したけれど、期末に書く個人の評価で、実にいい加減な答えを個人的にそれぞれが書いている。自分の能力に合わせてそれがプラスになったかあるいはマイナスになったかそういう評価の仕方のももあひませし、全部よかつたよかつたと書くのももあひませし、そういう点ももう少ししっかり指導が必要であるかと。それから私もがC-PLATSについて何らかの問題を抱えた場合にいったいどこにお伺ひしていいのか。芦原先生にお聞きすべきか、あるいは総合的な委員会的なものが存在できるのかどうか。そういう点もお考えいただきたいと思ひます。以上でございませ。

●仲野一

どうもありがとうございます。どこに相談したらいいのかと、先のことまでご心配くださつてのご提言だったかと思ひます。時間が追つてきておりますが、6人の先生がた、今日は前に出ていただきましたので、30秒ずつひと言お願ひしたいと思ひます。小森さんから願ひいたします。

●小森一

午前中の議論でもあひませた、先生方の学生を見守る余裕ということが必要だということで、最初に問題提起させていただきましたように、一緒に振り返つてやるという、そういうときに精神的余裕がないといけなひので、先生方の負担を減らすような、新しいことをやるやるうえでは、ビルトビルトビルトになるとしんどくなるので、スクラップの部分何かここで明確にできればいいかなと思ひましたので、それは出なかつたのでちょっと残念かなと思ひてひます。

●仲野一

今後の課題ですな。

●野波一

キャリアデザインの模擬データを担当するという立場から、イメージとしてOCDの一番下がソーシャルレスポンスビリティで、マナーのところかなり出て、あいさつなどそのあたりがすぐ出ましたので、今年の1年間のキャリアデザインは、ソーシャルレスポンスビリティでというところを頭に入れて、そこをやつていくというモデルケースで、他のことももちろんいろいろ学ぶけれども、そこをまず一番考えてみようという一つに絞つた形でやつてもいいのかなと思ひました。

●仲野一

野波先生はとりまとめというたいへんな大役ですけれども、みんな全学的に協力しながら応援したいと思ひますので、がんばつてください。尾崎先生お願ひします。

●尾崎一

今日はありがとうございます。このパネルディスカッションに参加させていだいて、議論が進むたびになんとなく全体が生活対応面のところに集約されてきて今の大学のある意味現状を示しているのだと思ひました。どうもありがとうございます。

●仲野一

評価といういい点をご指摘いだいてありがとうございます。ました。

●川窪一

今日、紙にはキャリアデザインこれしかないのですが、この間宿題でメジャーの資格につて全部、田淵先生に御支援いだいて建築に関して書いたのですが、ほかのメジャーもそうかと思ひますが、これでぜひお願ひなのですが、それぞれのメジャーに合わせたクラス編成であるとか教員編成であるとか、これをもう一回たとえば何科は分けなひとかあるかと思ひますが、ぜひメジャーに合わせた分を考へていだいて、このC-PLATSを達成するためにはぜひそれが必要ですので、最後にお願ひしたいと思ひます。

●仲野一

私たちの声を代弁してくださいました。ありがとうございます。

●廣田一

## C-PLATSの成功に向けて

ありがとうございました。これまでもそうでありましたが、なぜか走りながら考えているというのがクセになっている感じがします。やはり毎年毎年の変更はよろしくないと思います。ただこれは変更でなく改善と思いますので。しかし、先ほどから何べんも何べんも言っておりますように、まず4年間を、先ほどは3年間と言いました。3年間をしっかりとまずデザインしてから走るようにしたいところです。

## ●仲野—

ありがとうございます。切実です。

## ●高村—

私もいろんな立場がございますので。ただ一つ言えることは、このC-PLATSというのは学生の問題解決能力を開発するためのツールだということ。私たちが心がけなくてはいけないのは、C-PLATSの導入そのものが目的になってしまわないように知恵を出し合って一緒に考えていくということ。これを心がけたいと思います。どうぞよろしく願います。

## ●仲野—

風当たり強いときがありますが、がんばっていただけたらと思います。

今日は6人の先生がたも客席の先生がたもありがとうございます。お約束の時間にちょうどなっておりますが、本当に終始熱心に聞いていただきまして、寝ているかたが1人もいらっしやなくてとてうれしかったです。ギャラリーからもお声をたくさんいただきましたが、十分に、まだ言い足りないという先生もいらっしやいました。これは今日で終わりではございません。これからさらにさらに継続されていくべき問題だと思いますし、テーマだと思っておりますので、今日なかなかご発言の機会に恵まれなかった先生がた、その思いを持っていただきまして、このC-PLATSがよりよい形で大手前の前進していく原動力となるよう先生がたにご協力いただき、またお互いに知恵を出し合いながら、苦しみながらも進んでまいりたいと思います。本日は先生がた本当にありがとうございました。失礼いたしました。

